

れらを以て見るときは、舊都のあとに行宮頓宮を建させたまふなるべし、行宮頓宮かり宮にて、大友皇子天智の皇子始て五言の詩をつくり、大津皇子天武の皇子始て七言の詩を作、本朝文物權輿の地といへるは大津の事なりと、林學士鷺峯の文集に特に賞美しのせたり、誠に勝地といはざるべけんや、京都より江戸に赴く五十三次驛の最初にして、驛路の鈴を傳し其始は、孝徳天皇の大ありしは、慶長以來、神祖一統の後の例定なり、東海道中山道岐蘇道等を経歴するは、皆此驛にやらざるはなし、玄かのみならず、北陸道に行者も亦此驛よりす、平安城の固要樞の地なり、京より三里に至り、北越及陸奥出羽より、京都亦西の國々へ出す諸用の雜物、船にのせて越前敦賀へ出し、敦賀より馬にて荒乳山七里半の山路を越、當國貝津にいたし、又船にのせ湖上二十里を歴て、當津に著船、大津の名を宣なり。

〔東海道名所圖會〕近州大津京師より初の驛なり、これより東を關東とも坂東ともいふ、關東二津まで三里半餘也、旅籠町の名を八町といふ、此地は北越及び淡海國中の產物魚物等船にて運び、日毎に市をなして、京都へ交易す、町數九十六町、諸侯の藏屋舖多し。

〔日本書紀二十八〕元年八月甲申、命高市皇子宣近江群臣犯狀、則重罪八人坐極刑、仍斬右大臣中臣連金於淺井田根。

〔近江國輿地志略八十五〕田根沼 同村尾村○木にあり、二所にあり、土俗相傳、往古萬物の種、此處へ天よりふり、それより天下にあまねきゆへ、此邊を種の莊と云、今は田根の文字に書すと云、

〔東海道名所圖會〕粟津里これも城下の村里をいふなるべし、膳所

〔日本書紀二十八〕元年七月辛亥、大友皇子左右大臣等、僅身免以逃之、男依等即軍于粟津岡下、壬子、男依等斬近江將犬養連五十君、及谷直鹽手於粟津市。

〔日本書紀通證三十三〕粟津岡栗當作、栗、催馬樂、云、粟津乃原乃三、栗、栖野、後撰集云、關越氏粟津乃此子